ジュラシック・トーク

ブルックナーの「コールス版」について

■新しいブルックナーの作品全集

ブルックナーの楽譜の全集については、2 年前の「かいほうげん」Nr281 にまとめてあるように、国際ブルックナー協会という最も権威のある機関が編纂したものが MWV（音楽学術出版）から、出版されていました。そして、ごく最近、同じ出版元から装いも新たに「**新アントン・ブルックナー全集**（Neue Anton Bruckner Gesamtausgabe/NBG）」の編纂と出版が始まっていることもお知らせしてありました。

しかし、最近になってそれとは全く異なる「新しい」楽譜が出版され、それを使って演奏しているアルバムまでリリースされていることに気づきました。それは、「**アントン･ブルックナー原典版全集**（Anton Bruckner Urtext Gesamtausgabe/ABUGA）」という、非常に紛らわしい名前の全集です。「原典版」という単語が加わっているのが特徴でしょうか。もちろん、出版は MWV とは全く関係のないアレクサンダー・ヘルマンという出版社で、ディストリビューターはショットです。

なぜ、同じ時期に「NBG」と「ABUGA」という、とてもよく似た大掛かりな全集が 2 通りも出ることになったのかについては、2014 年に行われた、この全集編纂の中心人物、ベンヤミン＝グンナー・コールスへのインタビューで知ることができます。

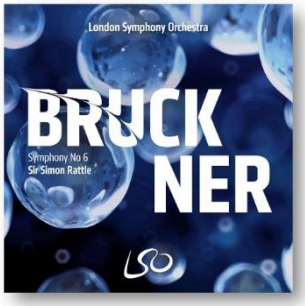
それによると、1995 年から MWV の編集者を務めていて、その成果も出版されていたコールスは、2010 年に、それまでにヨハン・シュトラウスの全集で大成功を収めていたウィーンの出版社のヘルマンから、新しいブルックナーの全集を作らないかというオファーを受けました。それを知った MWV は、それに対抗して 2011 年に新たな全集を作ることをアナウンスし、もちろんコールスにもその企画への参加を打診します。しかし、彼はかねてから MWV の編集姿勢には問題を感じていたこともあって、ヘルマンのオファーを受け、MWV での仕事を辞めました。

その MWV の問題というのは、まず、1929 年からの絶え間ない訂正によって、出版されるものは単なる「改訂版」でしかなくなっていること、そして、原典版には欠かせない校訂報告が、出版と同時ではなく、遅れて出され、時には校訂者以外が作ることがあるということ、さらに、校訂の基本的な方針などはハースの時に既に決まっていたことを受け継いでいるだけでアップデートされることはない、という 3 点です。

もちろん、コールス一人ですべての作品の校訂を行うことはできませんから、ヘルマンはまず「パトロン」としてニコラウス・アーノンクールを据え、交響曲以外のジャンルはそれぞれの専門家に任せることにして、2015 年から ABUGA の刊行を開始します。現在はアーノンクールは亡くなっているので、その後釜はサイモン・ラトルが務めています。

ですから、ラトルは積極的にこの新しい楽譜を使って演奏や録音を行っています。まずは、2015 年に「交響曲第 7 番」の ABUGA（つまり「コールス版」）の世界初演を行います。さらに、「交響曲第 6 番」では、2016 年の初演はマティアス・ギーセンに譲りましたが、2019 年のロンドン交響楽団とのライブ録音は、このエディションの世界初 SACD という栄誉を勝ち取りました。

LSO LIVE/LSO0887



LSO LIVE/LSO0842

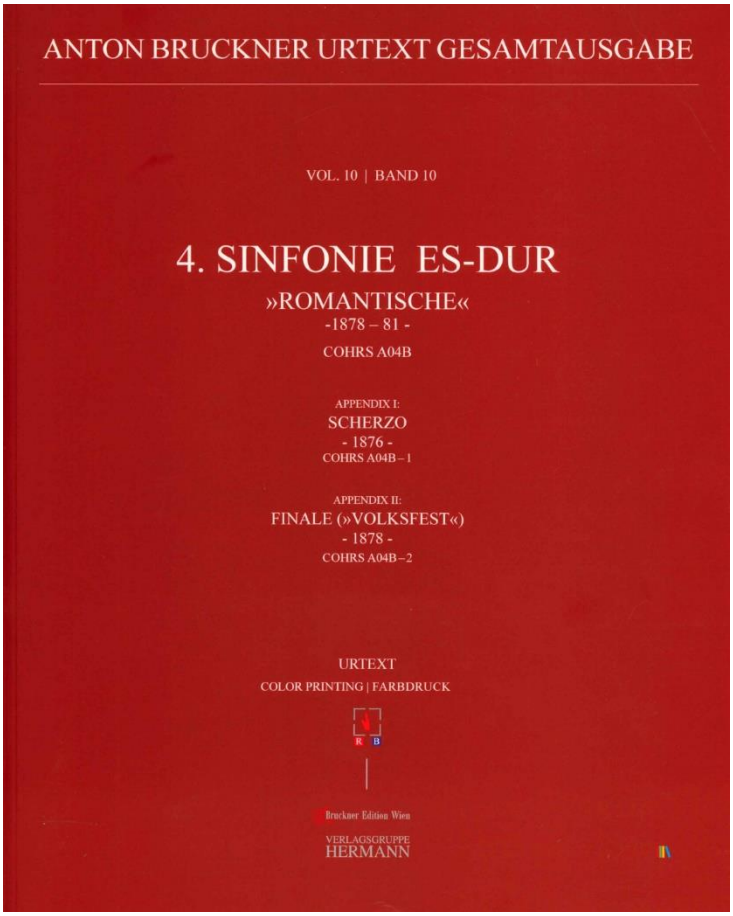
その全集は、完成すれば全部で 42 巻になるそうです。ここでは初稿も改訂稿も全て作られた年代順にナンバリングされ、校訂者の名前が最初に付けられていますから、コールスが校訂を行った交響曲（カテゴリー：A）に関しては、例えば、3 つの稿が存在している「交響曲第 4 番」の場合は、「第 1 稿」は第 6 巻で品番は「COHRS A04A」、「第 2 稿」は第 10 巻で「COHRS A04B」、そして「第 3 稿」は第 14 巻で「COHRS A04C」というようになっています。交響曲だけで 19 巻になります。

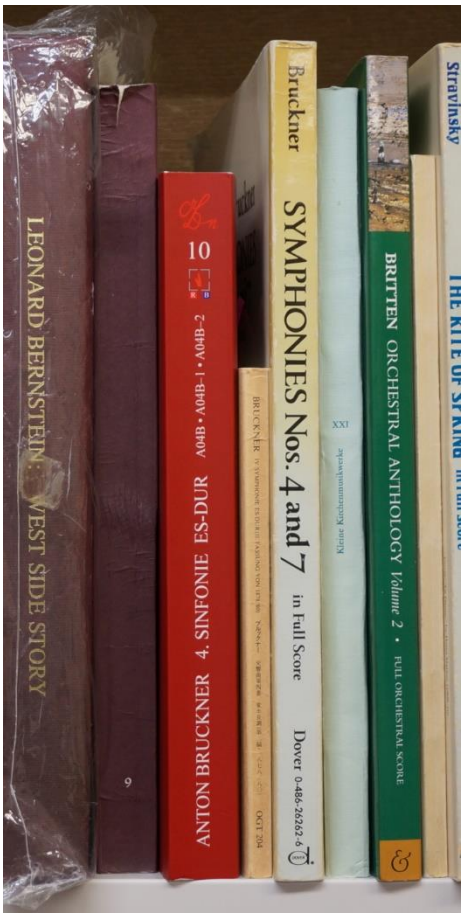
現在の目標としては、ブルックナーの生誕 200 年にあたる 2024 年までには、全ての番号付き交響曲の、少なくとも 1 つのバージョンだけは出版したいのだそうです。ただ、その中で、現在のところ出版が完了しているのは交響曲が 4 巻と、オーケストラ付きの宗教曲が 2 巻しかありませんから、来年中に目標を達成させるのはかなり難しいのではないでしょうか。

■交響曲第４番（第２稿）のコールス版

出版済みの楽譜はいずれもスコアとパート譜がレンタルという形で提供されていたので、個人で入手することは困難でしたが、最近になって「第４番（第２稿）」だけがスタディ・スコアとして普通に購入できるようになりました。

調べてみたら、すでに日本でも輸入版が手に入る楽譜屋さんも見つかりましたが、そこでの価格は税込みで27,456 円でした。かなり高額ですね。そこで、出版元のショットのサイトに行ってみたら、同じものが 96 ユーロ、送料を含めても 106 ユーロで入手できることがわかりました。その時の１ユーロは約 158 円でしたから、これは 16,748 円、１万円以上お得ですね。しかも、配送には 20 日程度かかると言っていたものがたった１週間で届いてしまいましたよ。

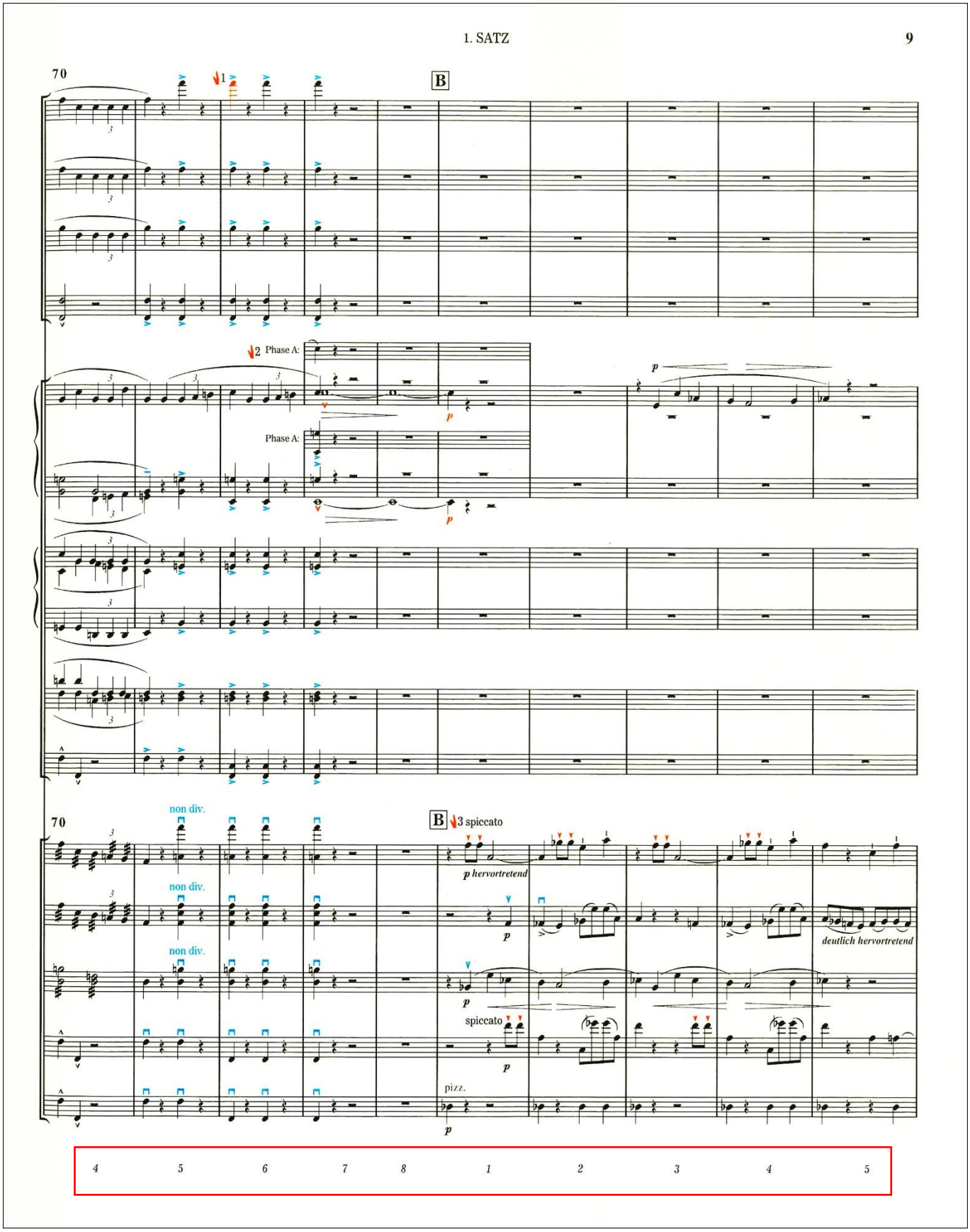




現物は、幅が A4 判、高さが B5 判という、幅広のサイズです。そして、驚くのがそのページ数。なんと 455 ページもありますよ。手元にある音友版のスコアが 152 ページですから、そのボリュームは異様です。DOVER 版では「７番」とのカップリングですが、それより厚いのですから。

こんなに「厚い」のは、第２稿の場合は、後半の２つの楽章が全く異なるものが２種類ずつあるので、それらを全部１冊にまとめたのと、100 ページに及ぶ詳細な校訂報告と注釈が付いているからです。なにしろ、コールスが国際ブルックナー協会と袂を分かつ原因となったのが、校訂報告のいい加減さでしたから、その面での充実は欠かせませんからね。

この「コールス版」の編集方針は、これまでの原典版と決定的に異なっています。楽譜出版にあたって使われるのはもちろん作曲家自身による自筆稿ですが、その中には細かい訂正なども入っていますし、さらに出版にあたって別の人によって清書された楽譜なども存在します。ブルックナーに限らず、これまでの原典版では、基本的にそれらの中から最も「正しい」と思われるテキストを選んで掲載する、というやり方でした。しかし、「コールス版」では、原典となっていたものの情報をすべて掲載する、という、非常に学術的な手法がとられているのです。つまり、演奏者が演奏するにあたってはこれらの選択肢の中から自分で選択する必要があるのです。ですから、「コールス版」と表記されている演奏には、何通りものヴァリアントが存在してくることになりますね。



これが実際の譜面です。まず、これまでの楽譜では全く反映されていなかった、自筆稿に記入されていた「番号」（赤枠内）が印刷されています。ブルックナーは、１から８、あるいはたまに１から６とか１から 10 という数字を、すべての小節に付けていたのですよ。

つまり、これによって、ブルックナーの作曲の手法が、この８小節の連続を基本としていたことが如実に分かるのですね。これは、多分指揮者にとっては非常に参考になるのではないでしょうか。

そして、このように「カラー」で、自筆稿にはないものが付け加えられているというのも、親切な配慮です。赤い字は本来書くべきものを付け足したもの、青い字は、演奏するうえで参考になるだろうという校訂者の親切心から記入されたもののようです。

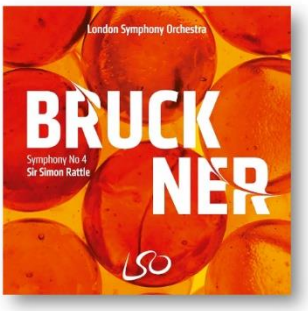
■サイモン・ラトルによる録音

ロベルト・ハースがこの交響曲第４番の第２稿の最初の原典版を作った時に元にしたのは、現在はウィーンの国立図書館に保存されている、「19476」という番号が付けられている自筆稿でした。

これは、IMSLP で見ることができます。その中には、1874 年に作られたこの交響曲を第１楽章から第３楽章までは 1878 年に、そしてフィナーレは 1880 年に改訂（第３楽章は、別の曲を作成）した、いわゆる「第２稿」の形の音楽が書きこまれています。したがって、これは「1878/80 年稿」とも呼ばれています。

その後、レオポルド・ノヴァークが、このハースの楽譜をさらに校訂した時には、この自筆稿のほかに、この曲が演奏される前後にさらに作曲家によって手が加えられた部分が含まれた、出版用の写筆稿が新たに参考にされました。そこから、ハース版とノヴァーク版との違いが出てくるのですね。これは 1880 年以降に作られたものなのですが、ノヴァークは「1878/80 年稿」という呼び方は変えてはいません。

しかし、今回のコールスが校訂した楽譜（コールス版）では、その写筆稿が、ウィーンのコピスト、ジョヴァンニ・ノルによって 1881 年に作られたものだ、と特定していて、しっかり「1878/81 年稿」という、これまでになかった言い方を使っています。このノルの写筆稿は、出版のために 1885 年にボーテ・ウント・ボック、1886 年にショットに持ち込まれますが、いずれもボツになってしまい、結局もう一度全面的に改訂された「第３稿」（1888 年稿）がアルベルト・グートマンから 1889 年に「初版」として出版されることになり、ハース版ができるまでは広く使われていたのですね。



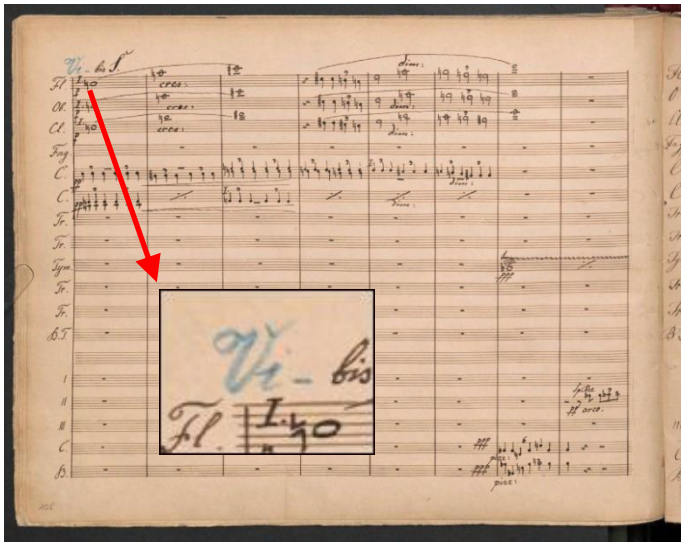
LSO LIVE/LSO0875

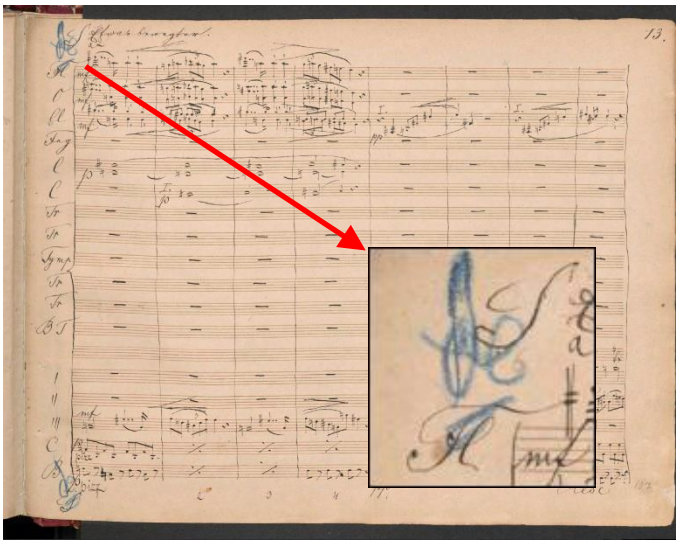
そして、最新のコールス版によって「パトロン」のサイモン・ラトルとロンドン交響楽団が録音した「交響曲第４番」の「第２稿」の最初の SACD が、これです。

ラトルたちがこの楽譜による世界初演を行ったのは、2021 年９月 19 日、会場はロンドンのバービカン・センターでした。その後、ルクセンブルク、フランクフルト（これが、ドイツ初演）、ドルトムント、ケルンと回った後、10 月５日にロンドンにもどって、ホームグラウンドのスタジオ、セント・ルークス・ジャーウッド・ホールでセッション録音が行われました。

セッション録音となったのには意味があって、ここでは、ライブで演奏されたであろうコールス版の一つの形の他に、この楽譜による様々なヴァリアントが、録音されていたのです。そのために、２枚組の SACD になっています。１枚目の、ラトルがコンサートで使ったであろうバージョンでは、フィナーレにものすごいサプライズが待っていました。これまでの原典版の 351 小節目から 430 小節目までが丸ごとなくなっていたのです。これは、展開部の最後のあたり、とても混沌とした部分から始まり（途中でセカンド・ヴァイオリン泣かせのところがあります）、それをフルート・ソロが明快に断ち切って再現部を呼び込むというかっこいい部分を経て、第２主題の直前までに至る部分です。そこには、聴いたことのない４小節も挿入されています。

自筆稿には確かにその指定がありました。なぜか、ハースもノヴァークも、この「vi -（ここから）」と「 de（ここまで）」を無視していたのですね。

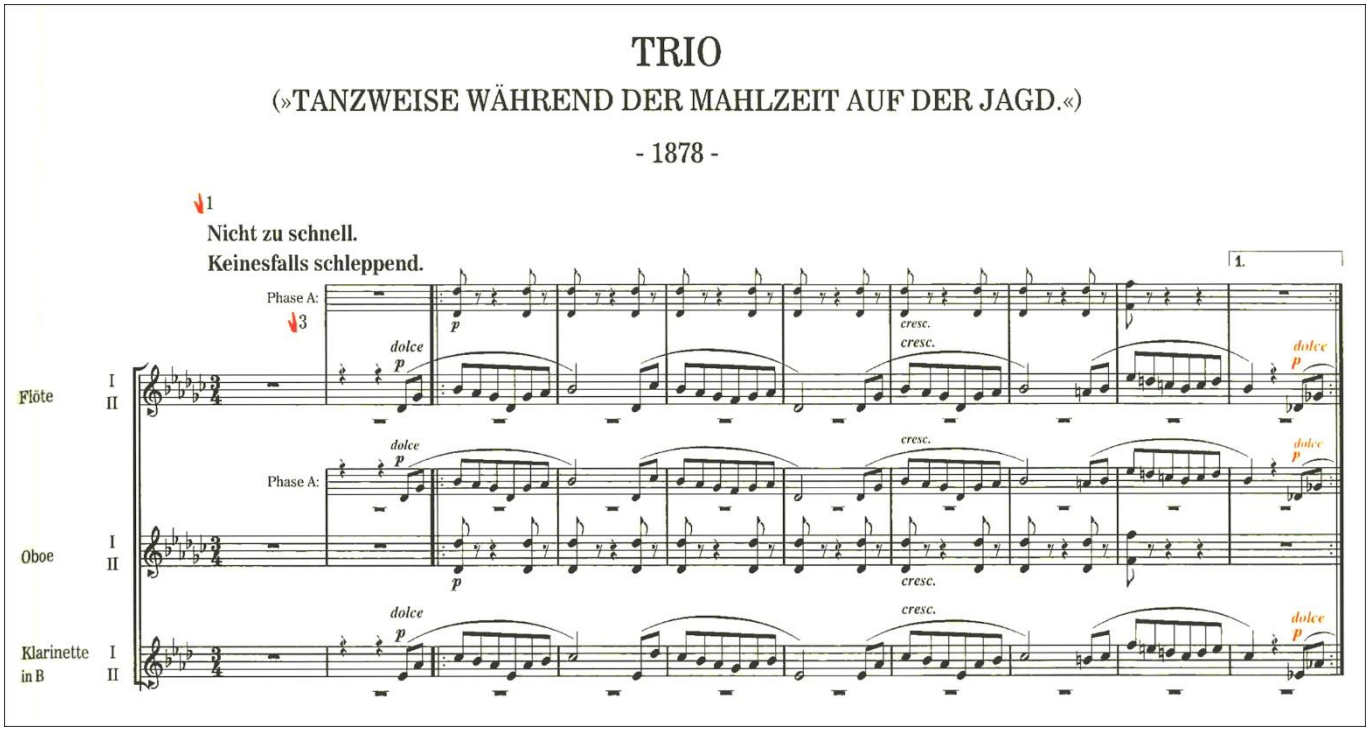




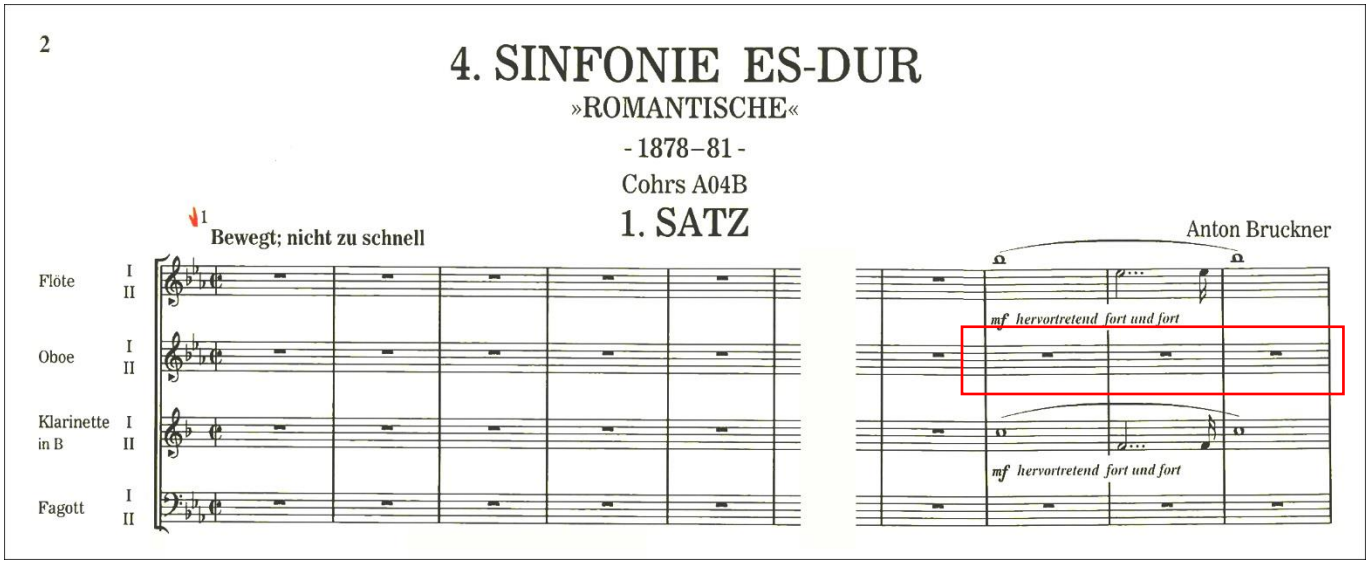
ですから、これはおそらく世界で初めてこのカットを実施した録音なのでしょう。でも、２枚目の SACD には、現行版によるフィナーレが入っていますから、ご安心ください。
逆に、同じように自筆稿に 20 小節カットが入っている第２楽章（191 小節目の前）は、ハースたちはカットしています。
そして、ラトルは、そのカットされる部分が残っている第２楽章も、２枚目で聴かせてくれているのです。そのような使い方ができるのが、コールス版なのです。

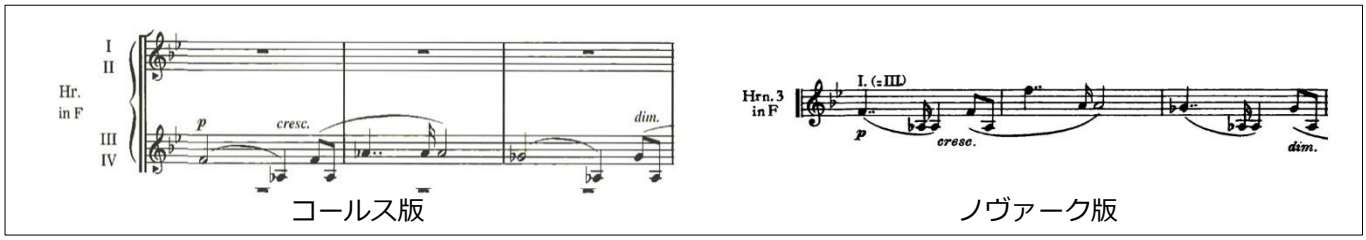
■コールス版の問題点

この楽譜では、複数のソースによる違いをあらわすときに、短い部分、例えば２ページ前の画像や、スケルツォ楽章のトリオ（フルートとオーボエのパートが入れ替わっている）などでは、そのまま２段に印刷されています。



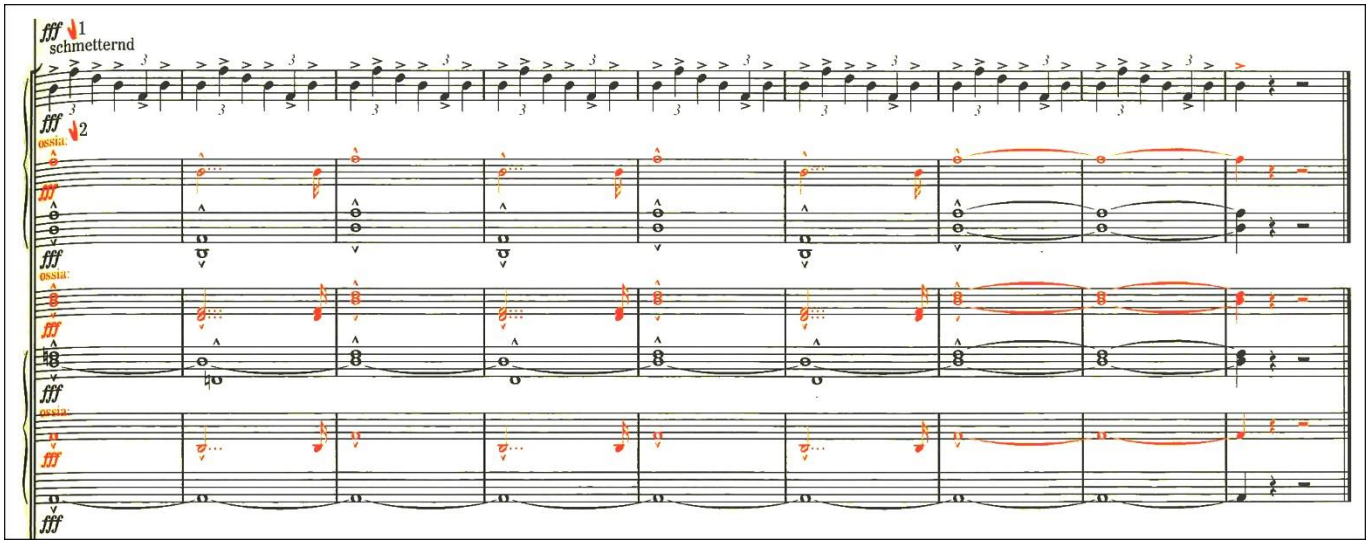
しかし、ラトルのアルバムで明らかになった、第２楽章やフィナーレにあるかなり大きなカットなどは、それを表記するために途中で丸ごと別のソースによるスコアを挟み込んであるのですね。一応番号が付けてあって、そこの間をジャンプするような指示はあるのですが、フィナーレでは３種類の楽譜でそれをやっているのですから、かなり煩雑です。しかも、その重複している部分にまで小節番号が続けて付けられていますから、それ以降の小節番号は何の意味もないものになっています。
この楽譜の最大の疑問は、第１楽章の 19 小節で、テーマにユニゾンでオーボエが加わるという部分や、第４楽章の 187 小節からの３番ホルンの音型などで、ノヴァーク版に見られる情報が全く反映されていないことです。





コールス版　　ノヴァーク版

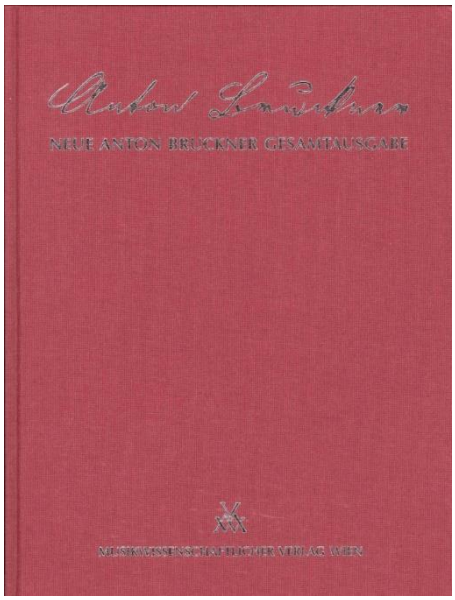
フィナーレの最後では、しっかりノヴァーク版のテキストも入っているというのに。



これだけのことで、この楽譜に対する信頼は完全に失墜してしまうのではないでしょうか。
何よりも、この出版にあたって、アーノンクールの後を受けて「パトロン」になっているラトル自身が、すでにロンドン交響楽団の首席指揮者を退任し、ミュンヘンのバイエルン放送交響楽団の首席指揮者のポストにありますから、もはやこのオーケストラとのツィクルスが完成される可能性はほとんどありません。実際、今シーズン（来年の７月まで）もロンドン交響楽団には桂冠指揮者として登壇することもあるのですが、そこではブルックナーが演奏される予定はありません。さらに、新任地のミュンヘンでも、そこのオーケストラとの今シーズンの彼の演奏曲目を見てみると、その中にはブルックナーの交響曲は１曲も入っていないのですからね。ラトルに見放された「コールス版」の行方は・・・。

■新アントン・ブルックナー全集（NBG）の動き

一方、「コールス版」を迎え撃つ形となった NBG でも、新しい楽譜の刊行が粛々と行われているようです。こちらも、CAPRICCIO レーベルが展開しているマルクス・ポシュナーの指揮によって、交響曲のすべてのバージョンの録音を行うというプロジェクト「#bruckner2024」の中で、すでに完成しているものはすべて NBG のものを使うことになっています。



これまでに「交響曲第２番第２稿」（ホークショー校訂）、「交響曲第４番第１、２,（３）稿」（コーストヴェット校訂/第３稿はノヴァーク版扱い）、「交響曲第８番第１稿」（ホークショー校訂）がリリースされていますし、今後も「交響曲第１番第１、２稿」（レダー校訂）、「交響曲第５番」（ゴールト校訂）、「交響曲第６番」（ウィリアムソン校訂）、「交響曲第７番」（ホークショー校訂）などの録音が予定されています。ただ、現時点では、これらの楽譜はまだ出版されてはいませんし、公式サイトにも、何の情報もありません。

ただ、2019 年に出版された「交響曲第４番第２稿」のフルスコアなどは、国内の楽譜店で購入すると布張りのハードカバーと、金箔押しの文字だからでしょうか、13 万円というベラボーな価格設定になっています。誰がこんなものを買うのでしょうか。